
セカンド・エース

中村 左千夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンド・エース

【Nコード】

N6060X

【作者名】

中村 左千夫

【あらすじ】

六文高校一年の真田甲斐は、空手の全国大会（男子の部）の優勝経験者であり、学園のテストでも男子の中ではいつも首位になる文武両道の男だが、それ以上の実力を持つ幼馴染の女の子、霧島響子に勝負を挑んではいつも負けていた。

今日も、彼は連敗記録をストップするために、そして女性に負ける情けない男という評価を覆し、可愛い彼女を作って学生らしい青春を送るために幼馴染の響子に様々な勝負を挑む。

そんなある日、福岡と北海道に直径一キロを超える大きな穴が出現し、そこから侵略者“炎邪”が現れて……

愛とシリアスと笑いとロボットの融合を目指したSFアクション
コメディ！

プロローグ

軍勢は壊滅寸前だった。

戦え、と鼓舞し続けた上官は声を枯らし切り、この世の末に絶望しながら死んだ。

戦場は化物——炎邪の発する数百数千の雄叫びに支配されている。炎邪とは、全長十メートルを超える獣だった。熊のような大型肉食獣タイプもいれば、オオカミにも似た機敏そうなタイプもいる。ただ、どのタイプも全身の毛が燃え上がる炎のように逆立っており、その特徴が炎邪という名前の由来となっていた。

思い出されるあの日。

五年前。福岡と北海道に突如出現した大穴。覗けば陽の光も届かない奥底から炎邪は這い出てきた。

それから始まったのは、巨大な牙と、体躯と、そして黒爪を振るい生み出される虐殺だった。

人類は様々なものを奪われた。より多くを奪われないために武器を手にとって戦いを始めるのは当然だった。しかし、犠牲は増えるばかりで、繁栄を誇った人類はすでにその数を十分の一にまで減らされる事になった。

長く続いた人類と炎邪の戦い。終焉は近く、同時にそれは人類の歴史が終わることと同義だった。

『大本営から最後の命令を伝える』

戦場の真ただ中。

通信機からの言葉を聞きながら、少年は意味の無い慟哭を繰り返す。炎邪と対抗できるだけの体格を求めた人類が作り出した対炎邪用人型決戦兵器“サーヴァント”。通称SVとも呼ばれている操縦席の中である。

『本日1800をもつて、守護作戦は中止とする』

少年は全長十メートルを越すSVを軽快な動作で地面から跳躍させると、目前の炎邪の迫る。空中で腰の兵装ラックから刃先がチェインソーになっている短剣を取り出し、落下と同時に炎邪の頭部に突き刺す。

肉を切り裂く音と同時に、黒い体躯が断末魔の叫びを上げ、地響きを起こしそうな鈍重な音を立てて横転し、痙攣したのちに動かなくなった。

少年はそれを確認することなく、横跳びで傍の炎邪に踊るように飛び掛かる。繰り出される炎邪の黒爪の一撃をかわし、ナイフを腰だめに抱えて、炎邪の胸元に押し込む。切っ先からは灰色の体液が噴出し、この怪物も断末魔をあげて息絶えた。

少年は手元の短剣を引き戻すと、その刃を見て眉をひそめた。

刃先が根元から折れていた。

出撃したときに持っていた各種装備は、長い戦闘で紛失、もしくは破損していた。いま手元にある短剣だけが、最後の武器だった。

『同時に諸君らの軍属としての任を解く。諸君らは自由だ。残りの時間、各々安らかに過ごしてくれ』

仲間の死臭を察知して数多くの炎邪が集まってきている。

退路を確保していた味方と連絡が取れなくなつてから一時間は経つ。その退路方向からも炎邪の群れが迫つてくるところを見ると、その理由は考えるまでも無かった。

『最後に、諸君らと共に戦えた事は私の誇りである。ありがとう。以上だ』

通信が切れる。

少年はコクピットの周囲に映し出される刃の欠けた剣をジッと見つめ、乾いた声で小さく笑った。

『みんな。今の通信は聞いたな』

次の通信は、少年の部隊の隊長からだった。

『あとは各々好きにしてくれ。中隊はこれにて解散とする』

少年は、本当に全てが終わってしまったのだと理解した。いつも直接命令を受けていた人物から言葉から聞くと、その事実が現実であることを強く認識できた。

リーダーに点灯する敵の数が一秒ごとに増えていく。隊長の声に続き、何人かのすすり泣きが通信機から漏れてきた。まだ生き残って戦っていたのだろう仲間の声だというのはすぐに分かった。

「好きに、か」

もう必要は無いだろう、と考えて少年は通信機のスイッチを切った。

「好きにしろと言うのなら、好きにやらせてもらっさ」

少年は短剣を投げ捨て、目の前に立ちはだかる、壁と呼べるような炎邪の集団を睨みつける。

武器は無い。体力も限界。エネルギー切れ寸前のせいか撤退を訴える機体A Iの警告音すら弱々しい。

「この戦いはお前らの勝ちだが、そんなの俺には関係ない」

少年の意思に反応して、S Vが一步前に足を踏み出す。

「俺の望みは、お前らを一匹でも多く地獄に叩きこむことだ」

勝つとか負けるとか、そんなことはもうどうでも良かった。

すでに少年の人生は死んでいる。だから死への恐怖などは微塵も無い。

ただ体の動き続ける限り奴らへ殺意を叩き付ける。それだけが、少年が今日まで生きることを選んだ理由だった。

やがて、人類は全滅した。

1 - 1 霧島家の朝

小気味よい音が台所に響いている。包丁の音だ。

真田甲斐の慣れた手つきに操られた包丁が、ツヤ良いキャベツを刻んでいた。

グツグツグツ、と鍋が煮立ってきた。蓋を開けるとふわっと味噌の香りが広がる。昨晚に作った味噌汁の風味が損なわれていない事を確認して、すぐにコンロの火を止めた。

甲斐の好みとしては、多少風味が飛んでしまっても沸騰するぐらいの熱い味噌汁が好きなのだが、この家の人間は、全員が猫舌持ちなため、温めの味噌汁を食卓に乗せるのが通例だった。

「さて、お次は」

迷うことなく傍の棚から目的の調理用油を取り出し、フライパンにかける。同時に別容器に卵を溶いて、自作のだし汁を絡ませる。

このだし汁は、中学入学から始まった甲斐の料理人生から三年の月日をかけて開発した鰹だしベースの自信作だった。これを使った卵焼きは、ちよつとしたきっかけでもあれば甲斐のクラスで争奪戦が始まるほど好評である。

熱せられる油の振動を横目で確認しながら、頃合いになったところで溶いた卵を一気にフライパンに投入。

ここからが勝負だ、と自分に言い聞かせて、甲斐は神経を研ぎ澄ます。

刹那、彼はクワツと目を見開き、小刻みに右手の菜箸を動かすと同時に、左手でフライパンを巧みに操作しながら卵を丸めていく。高温のフライパンで手早く焼き上げられた卵焼きはマシユマ口のよくな弾力と、宝石のような艶を帯びていた。

自身の最高傑作を皿の上に乗せ、出来栄を眺めていると自然に笑みがこぼれた。

「相変わらず、高校生とは思えない惚れ惚れするような腕前ね」

台所の入口から声がした。聞きなれた声だったので、甲斐はフライパンを流し台に運んでから目を向けた。

そこに立っていたのは、この家の最年長者である霧島文子だった。パジャマ姿なので寝起きなのだろうが、腰元まで伸びる長髪は一切乱れていない。まだ眠気を完全には振り払えていないのか、その整った顔立ちを崩さない程度に小さく欠伸をした。

文子は甲斐より一つ年上で、甲斐の通う六文高校では生徒会長を務めている。学生たちに文子の評価を伺うと、返ってくるのはおそらく最上の賛美だろう。性格は慎み深く、人当たりが良く、クラスメイトや後輩にも優しい。それでいて物事への取り組みには甘えが無く、任された仕事は常に依頼以上の出来栄えで完成させるため生徒会長としては、学園始まって以来の最高の有能者との声も高い。

また人気者でもあり、彼女にあこがれている男子生徒は多く、他校からわざわざ彼女を見物にくる人間がいるぐらいだった。

出会ってからすでに五年。訳あって霧島家に出入りするようになってから四年以上が経過しているが、いまだにこうやって一対一で対応すると、甲斐は少なからず緊張してしまう。

「おはようございます。今日は、魚屋さんがサンマを安くしてくれただんでかば焼きにしてみました」

文子は、食卓に並べられたかば焼きに目を落とすと、熱のこもった息を吐いた。

「かば焼き。あっさりとして、それでいてジューシー。やっぱりこの時期はサンマよね。甲斐ちゃんの料理なら、なんでも美味しいんだけど」

「どーも」

褒められたことにお礼を言いながら、甲斐は再び台所に目を戻す。そろそろ、ナベを使って炊き上げているご飯の火を止めねばならなかった。

この家の人間は、文子も含めて炊飯ジャーより文化鍋で炊きあがったご飯の方が好みで、時間が無いときなどに炊飯ジャーで炊き上

げたご飯を食卓に出すと、文句は出ないが三対の視線の圧迫に晒されるのである。

「そうそう、昨日のゆくゆく大辞典、見た？」

ゆくゆく大辞典とは、日曜の夜中に放送している情報発信番組で、この番組に紹介された食品は翌日のスーパーで確実に売り切れる程に人気があつた。

「見ましたよ。茄子特集でしたね」

と、甲斐は火を止めながら応じた。

「私、今日の夕食はマーボ茄子が食べたーい」

「別にかまいませんが、その希望は上にいる奴に言ってもらえませんか。当番は俺って決まったわけじゃないんで」

文化鍋の中を軽くしゃもじでかき回して、蒸らすために蓋をしめる。

「じゃあ、私は顔を洗ってくるから、ウチの眠り姫をお願い。あの子、きっと王子様の到来を今か今かと待ちわびてると思うから」

「忘れられない朝にしてやりますよ」

甲斐は身に付けていたエプロンを手に取って一度、気合を込めてグツと握り締めた。そのあと、近場の椅子に放ると、文子の傍を通りすぎて二階へ向かう。

「甲斐ちゃん」

「情けをかけるってというのは断りますよ。そんな相手じゃないですから」

「今日、マーボ茄子お願いね」

「いや、だから」

反論しようとしたが、文子は「ナス、ナスおナス〜」という意味不明な歌を歌いながら軽い足取りで洗面台のあるお風呂場に向かってしまった。甲斐は、追いかけるまでの意義も見い出せず、諦めて階段に足を向けた。

あえてドスドスと音を立てて二階の廊下を進み、やがて、一つの扉の前で足を止める。“響子の部屋”という立札があり、当然のこ

とながら甲斐の部屋ではないのだが、彼は躊躇なくドアノブを回した。

中は薄暗かった。外にはすでに太陽が昇っているのだが、その光をカーテンが遮っているからである。

甲斐は部屋の奥に進み、カーテンを一気に開け放った。

「うん……」

唸るような声がした。部屋の隅にあるベッドの膨らみからである。「そろそろ起きろよ」

そのベッドの膨らみに声をかけるが、反応はない。だが、布団はモゾモゾと動いている。

「おい、響子」

反応は無い。

「仕方ないな」

甲斐は布団の膨らみに手を伸ばし、足を踏み込み、腰を回し、腕を伸縮させ思いつきり拳を叩き込んだ。

空手三段の段位を持つ甲斐の打撃である。ボフツとした抵抗力的ないの感触とともに布団が両側に大きく跳ね上がった。

手ごたえは無い。当然だ。こんな不意打ちが通用する相手だなんて微塵も思っていない。

「朝っぱらから。いい加減にしてくれないか」

背後からあくび混じりの声。甲斐は布団から拳を戻してからゆっくりと振り返る。

立っていたのは、パジャマ姿の少女だった。

霧島響子。甲斐と同じ六文高校の一年生で、霧島三姉妹の次女である。つまり、先ほどの文子の妹だ。

響子は、学園のファンから表現される、吸い込まれそうで大きく、猫科動物のような鋭さを持った瞳を眠そうに擦りながら、空いた方の手で肩まで伸びる黒髪の根元をボリボリと搔いていた。

ちなみにこちららも寝起きであるのに寝癖などが一切ない。三女の

寝癖姿も見たことが無いので、もしかしたらこの三姉妹の髪は何らかの特殊素材で出来ているのかもしれない。

「毎朝毎朝、婦女子の部屋に遠慮なく足を踏み入れる。その神経はどうかと思うぞ」

「お前が約束を守らないからだろ」

「約束？」

「寝ばけるな。俺が一体全体何のために眠たい目をこすって朝食作りに来てると思ってるんだ」

響子はしばらくボケーとこちらを見つめていたが、やがて鈍重な動きで手を叩いた。

「ああ、そっぴやあそっぴやだっぴや。いや、なんかお前がウチの台所の景色に溶け込みすぎてるから忘れていた」

「この野郎」

額にて血管の脈動を感じる。自然と拳の握りが強くなる。

「そう怒るなよ」

そして響子は、鼻をヒクヒクと動かした。

「今日はサンマか。ちゃんと飯を作ってくれたみたいだし、きちんと勝負を受けるよ」

「なら、さっさと顔を洗って道場来いよ」

そのまま部屋から出ようとすると、ちよつと待てよ、と呼び止められた。

「ここでやろうぜ」

響子は両手を腰に当てて、構えもせずにくう言い放った。

「なんだと？」

「どうせすぐ終わるんだからさ、わざわざ胴着に着替えるのめんどくさいだろ。その後もシャワー浴びなきゃなんないし」

「……」

「かかってくるなら早くしてくれ。腹が減ってる」

と言って、響子はまた大きく欠伸をした。

甲斐の額に明確な青筋が浮かぶ。どこまでも舐め切ったその態度

に、これ以上ないほど腹が立つ。

「俺は別に構わないが」

改めて向き直って、甲斐は静かに言った。

「部屋の中が滅茶苦茶になるぞ」

「それはない。せいぜい埃が立つ程度だろ。ほら、そこに置いてある空気洗浄機、安物なんだが意外に性能良いんだぜ」

あくまで眠たげな顔でそう言う。

「そうか、それは良かったな！」

甲斐はそのまま中段に構えて、響子に殴りかかった。

。

響子に負けることが悔しかった。

幼少の時から格闘技だけではなく、スポーツも、勉強も敵わなかった。

だから挑み続けた。

勝負の内容は問わなかった。二人とも格闘技をやっている事から取っ組み合いのことが多いが、体育の授業がバスケット、サッカーならサッカーで勝負して、マラソンならマラソンで勝負した。そして、定期試験の時は、その順位で勝負をした。

それは小学校六年生の頃に出会ってからずっと続いている。しかも、一日に何度もだ。勝負については、響子の方もおおむね快く受けるが、中学校に入ると、親がいない三姉妹暮らして家事をしなければいけないから放課後や早朝の勝負の時間は取れないと断られるようになった。

甲斐は、

「負ければ自分が食事を作る、だから勝負しろ」と提案し、やがてそれは霧島家の掃除を肩代わりして、いつの間にか霧島家の空手道場の手伝いまでさせられる羽目になり、それが高校に入学する頃には日常となってしまうた。

そして今日まで、甲斐は一度も響子に勝ったことが無い。

「というわけで、今日はマーボー茄子が食べたいんだけど」

食卓の上座に腰かけている文子が言った。

霧島家の居間には、甲斐の準備した朝食が並べられている。

「分かりました……」

茶碗にごはんをよそいながら、甲斐は力なく頷いた。響子との勝負に負けた甲斐は、今晚の食事を作る事になってしまったので、文子の要望を素直に受けるしかなかった。

「今日は一段と激しかったみたいね」

アザと傷にまみれた甲斐の顔を見ながら、文子は冷や汗を垂らすと、姉妹共通の大きな瞳を丸くした。

「当然だ」

甲斐の対面に座る響子がふてくされながら言う。すでに顔も洗って制服に着替えており、髪型もポニーテールにまとめている。彼女は、先ほどまでの寝起きと違い、武道家の娘らしく背筋をピンと伸ばしながら味噌汁をすすっていた。

「にしても響子。これはあんまりじゃないの？ いつもより甲斐君の顔が五割増しで酷いことになってるじゃない」

「命を奪わなかっただけでも感謝して欲しいくらいだ」

その言いように何かを感じ取ったのか、文子は箸の先を口にくわえながらしばし沈黙した後、

「何かあったの？」

はむ、と卵焼きを頬張って幸せそうな微笑を浮かべながら言った。

「実は――」

甲斐が話そうとすると、テーブルが音を立てて揺れた。響子が手に持ったお椀をたたくような勢いでテーブルに置いたからだだった。

「このバカが、あたしの下着を部屋にばら撒いたんだよ」

文子は、またまた目を丸くした後、一日中台所に置きっぱなしにしたご飯のように冷たく、そして乾いた視線で甲斐を見た。

「なるほど。今日は正攻法ではなくかく乱戦法でいったのね。確か

に、男性に自分の下着を部屋にばら撒かれたら私でも動揺するわ」

甲斐は断固として抗議した。

「ちよつと待て響子！　まるで俺が自分の意思でお前の下着をばら撒いたかのように言うんじゃない！」

「違うの？」

「文子さんもそんな、証拠がそろいまくっていても最後まで私は無罪だと主張し続けながらも無理やりパトカーに乗せられる往生際の悪い性犯罪者を見るような目で俺を見ないで下さいよ！」

「そこまでは思い至らなかったけど……」

「響子が、俺をタンスに吹っ飛ばしたから、タンスの中の下着が部屋に散らばった。それだけです」

「それなら、仕方が無いじゃない？　そもそも、道場じゃなくて自分の部屋で戦おうとしたのは響子、あなたなんですよ」

「でも文姉え。こいつ、散らばった様々な衣類の中から迷うことなく私のブラを手にとって、その匂いを嗅いだんだぞ」

「……本当なの？」

「ば、ば、ば、バカ言うな響子。俺は断じてそんなことは——」

「したじゃねえか。私はこの目でしかと見たぞ」

「あれは。お前に殴られて鼻血が出てた上に、殴られた衝撃で視界も定まっていなくて。そしたら、近くに薄くて四角いものが目の前にあったからティッシュだと思ってだな……」

「それでも、ふつうブラとティッシュは間違えないんじゃない？」

「いや、そりゃあ文子さんのだったら間違えないですけど、こいつのは仕方が無、って響子どうしたんだ？　台所からフォークをそんなに沢山持ってきて……おう！？」

空気を切り裂くような音がした後、甲斐の顔の横を弾丸のような速さで飛来したフォークがすり抜けた。

「悪かったな！　どうせ私のブラはティッシュと間違えるぐらいに薄っぺらいよ！」

飛んでくるフォーク時々ナイフの軌道には遠慮が微塵も無かった。

リングなら余裕で突き刺さるレベルであり、ナイフなら貫通しそうだ。

「ば、バカ。やめろ！」

甲斐は、それらを手元の箸で弾いて器用にブロックする。

「二人とも、それぐらいにして頂戴。ご飯時にあばれると埃が立つでしょ」

目の前でそんなやり取りが行われていても、文子はひとり落ち着いて朝食を食べていた。

「でもよ文姉え」

「響子。私は座りなさいと言ったのよ」

姉に注意されて、攻撃の手を止めつつも盛大な舌打ちをしながら腰かけた響子だったが、いまだその眼は殺気に満ちており、かつ甲斐を捉えていた。

「甲斐君も。女の子の身体的特徴を貶めるなんて最低よ」

「すみませんでした」

甲斐も二刀流ならぬ二箸流の構えを解いて、おとなしく食卓に戻る。

場が静寂を取り戻してから程無くして、甲斐はふと、気が付いた。

「ところで、桜子ちゃんの姿が見えませんか」

何本かのフォークが叩き落とせずに腕を切っていたので、本物のティッシュで止血をしながら器用に食事を続ける甲斐は、この家の三女の行方を尋ねた。

三姉妹の中で唯一の中学生であり、これから一日を同じ校舎で過ごす文子、響子と違って桜子とは朝と夜にしか会えないのである。

雑誌のモデルにスカウトされるほどのあの可愛い顔を、朝の内にしっかりと拝んでおきたいのだが……。

「桜なら修学旅行だ」

響子がムスツとした口調で応える。まだ怒っているらしい。だが、いまはそんな事はどうでも良い。

「なっ、俺は聞いてないぞ！」

思わず立ち上がったてしまつぐらい甲斐はショックを受けた。

「私は言つて無いし。桜もお前を避けてるしな」

「私はてつきり甲斐ちゃんにも伝えてるものだとばかり思つてたわ」
「な、なんてこつた。毎朝桜子ちゃんの顔を見てほつこりするのが俺の日課だというのに！」

「甲斐ちゃんのそういう冗談、桜子は本気で嫌がつてたわよ」

「しかも、“ほつこり”つて本来そういう使い方しないしな」

「言葉の意図が伝われば問題ない。些細なことだ」

「桜の気持ちの方は些細じゃないだろ」

甲斐はフツと軽く笑みを浮かべて、自身の黒髪をサラツとかき上げる。

「照れているんだろ」

「あれだけ本人から“死ね”だの“腐れロリコン犯罪者”だの“キモ。死んでください”だの罵詈雑言を浴びせられていながらもその発想。幸せな思考回路をしてるなお前は」

「にしても、修学旅行つてどこに行ったんだ」

と、響子の言葉を無視して、甲斐は心底がっかりしつつ力なく座りながら訊ねた。

「京都、とか言つてたかしら」

文子が食べ終わった食器を片づけながら答えた。

「いつ帰つてくるんです？」

「えっと、確か三泊四日だから、四日後ね」

「四日か。結構あるな」

「さあ、そろそろ学校に行かないと本当に遅刻するわ。二人とも急いで。生徒会長である私の妹と弟分が遅刻なんて許さないんだから」
文子の言葉を最後に、甲斐と響子は黙つて残りのおかずを口に放り込む。

こんな感じのやりとりをしながら、霧島家から学校に通うのが甲斐と霧島姉妹の朝の日常だった。

1 - 2 友人と生徒会長

六文高校は、見冬町のちょうど中心にある小山に位置している。校門へは五十メートル程の坂道を登る必要があり、学内の運動部には心臓破りの坂として知られていた。

季節は秋暮。気温は多少肌寒くはあるものの、衣替えの済んだ厚手の制服でその坂道を全力疾走すれば汗もかく。

「私の勝ち♪」

響子の勝利宣言が終わったぐらいのところで、ようやく甲斐は校門をくぐる事ができた。

霧島家から六文高校までのおおよそ三キロの行程でどちらが先に学校までたどり着けるか、というのも恒例の勝負だった。

甲斐は息を切らしながら倒れるように地面に座り込む。

「いやあ、甲斐。今日は惜しかった。スパーきたくらの交差点で瞬獄殺を極められなかったら、負けてたかしんないな」

甲斐は息を整える必要があり、すぐに言葉を返せなかった。

この勝負はお互いへの妨害を可としている。結果として甲斐は朝の騒動以上に生傷を増やすことになった。

対して響子は多少は息を切らしているものの、軽口が叩ける余裕はあるようだ。

「化物め」

擦れるように呟くと、すかさず頭部に衝撃が走る。殴られた。とても痛い。この女の拳は相変わらず、甲斐の知るどの武道家よりも固くできている。

「だれが化物だ。ああ？」

引きつった顔で迫られる。

「……」

ジッと響子を見ていると、今度は逆の拳が襲いかかってきた。あまりにも強力な一撃だったので、一瞬頭が無くなったのかと錯覚し

た。

「まあいいや。私の勝ちには変わりがないわけだし。そうだなあ、何をしてもらおうかなあ……決めた。帰りに“満腹堂”の絶品饅頭チョコレートパフェを奢ってもらおう」

「……分かった」

一回の勝負に負けるたびに響子の命令を一つ聞く。それが、中学一年の夏に交わした約束だった。黙ってその命令を受け入れる事は酷く屈辱だが、約束を破ることは、甲斐のプライドが許さない。

「よし、そんじゃあいつも通りに一緒に帰ろうな」

子供みtainな笑顔を浮かべた後、響子は鞆を肩にかけて校舎の下駄箱に向かっていった。

「相変わらず君たちは仲が良いな」

と、響子の後姿を憎々しげに見ていた甲斐に近づいてきて、冗談にもならない事をサラリと言うのは、武田信二という残念ながら男のクラスメイトだった。きまりの悪い癖毛のボサボサ頭と遺伝的な問題らしく赤い瞳を持っているのが特徴的な少年である。

「おはよう真田君」

「信二か。俺の呼び方は甲斐でいいって言わなかったか」

信二は外国からこの高校に転校してきてから一週間しか経っていないので、どのクラスメイトに対しても敬語だった。しかし、なんだかんだで気が合って今では一緒にいることが多いので、甲斐は信二の事を呼び捨てにしている。

「それと怖いことを言うんじゃない」

「怖いことって？」

「俺と響子の仲が良さそうとかなんとか言っただろ」

「何か問題なのか？」

「誰が仲良くなどするものか。俺があいつのせいでエライ目に合っ
ていて、日々悩んでいるのを知ってるだろ」

はて、と信二は首をかしげた後、

「ああ、この前聞いたあれか。正直、悩みとは思えない悩みだけど」

甲斐は黙って立ち上がると、信二の傍まで歩いていく。

「そうだろうよ。女の子と同棲してるお前には、俺の彼女が欲しいという望みはさぞかし滑稽に映るのだろう。そんなに惨めか!? 入学早々十連敗の俺がそんなに面白いか!?」

理不尽に迫る甲斐。避けるように信二は数歩後ずさった。

「何を勘違いしてるんだ。同居しているのは外国に住んでる俺の父親の友達の娘であって、お前が考えてるような事は一切ない。それに二人で暮らしてるわけじゃなくて、父親の友達の奥さんもいれての三人暮らしだ」

「それでも女の子と同居に変わりはないだろ。畜生。爆発しろ!」

「おいおい、あの霧島家に出入りしてるお前がそれを言うのか」

と、信二が反論してきた。

学内だけでなく学外にもその人気が及んでいる上に生徒会長を務める長女の霧島文子。女子を始めとしてファンが多く、長女同様に文武両道な次女の霧島響子。中学生ながら、雑誌のグラビアでモデル活動を行っているだけでなく、部活のバスケットボールでは県大会優勝高のキャプテンを務める三女の霧島桜子。

三人とも顔立ちは整っており、見冬町の美人三姉妹と言えばかなり名が知られている。おそらく、町民ではこの三姉妹の存在を知らない人の方が少ないのではないだろうか。

そして幸か不幸か、そんな霧島家に出入りしている男子は空手道場の子供たちを除けば真田甲斐だけだった。

しかし、それは決して甲斐が望んでそうだったわけではない。

「好きで出入りしているわけじゃない」

「どうだかな。美人三姉妹の家に出入りしたくてワザと負けてるんじゃないかとの噂だが」

「ははははは、面白いなその噂」

「俺が言ってるわけじゃない。だから笑いながら殴りかかってくるな。っていうか結構痛いぞ」

甲斐はかなり本気で信二に向かって拳を何度も打ち出しているの

だが、信二はそれを片手で難無く捌いている。一週間、共に学園生活を送ってみて分かったが、信二は運動神経がかなり良い。一年生の中では響子、甲斐に続いて体育の時間では目立っている。

更に頭も良い。

スポーツ拔群、そして頭も良く、顔も良いところまでは甲斐と一緒になのだが、甲斐と違ってとにかく信二はモテた。転校してきてから一週間になるが、すでに何人かの女性からアプローチをかけられているという噂だ。

「なんか殴る力がどんどん強くなってないか」

「そりゃあ、強くしてるからな」

「お前な……」

間に陰湿な空気が流れかけた時、甲高い車のクラクションが割り込んできた。

二人が同時に音の方向——校門の方を同時に見ると、乾燥した校庭に土煙を上げながら校内にトラックが入ってきているところだった。

大きなトラックだ。全長十メートルはあるかもしれない。

「何だあれは？」

拳を振りかぶるのを止めて尋ねると、信二がすぐに応じた。

「輸送トラックだろ。SVの」

SV。甲斐がその正体に思い至るのには少々時間が必要だった。

SVとはサーヴァントと呼ばれる人型の建設機械である。全長は五メートルから、それ以上のものまで様々ある。多くの建設機械と同じく黄色を基調としたカラーリングをされていて、本体の四角い箱のようなコクピットから、胴体に比較すると細めの四肢が取り付けられている。

馬力や整備性などにまだまだ問題を残しているものの、二足歩行を生かした悪地での作業や、マニピュレーターによる車両型建設機械では困難な精密作業、人命救助などの分野においてその性能が評価され、現在では大きな建設現場などに行けば数台は見かけるぐら

いに普及していた。

と、先日のニュースで紹介されていた気がする。

もっとも、いくら普及していると言っても、学校で見かけるには不釣り合いなものであることは変わり無い。

「なんでSVがウチの高校に？ どこか工事でもあるのか？」

と甲斐が不思議そうに言うと、信二が呆れた様子で答えた。

「来週からSVの操縦は、一部の公立高校の体育の授業に組み込まれる事になったんだよ。先生が言ってただろ」

「へえ、ウチは工業系の学科があるわけでも無いのにな」

「そうだな」

「にしても、あんな重機の操縦なんて覚えてどうするんだ」

「SVはレスキューや精密動作におけるその有用性が立証され始めている他、一昔前なら、専門の操縦者しか乗れないようなものだったが、現在は操縦性の問題もずいぶん改善されて、素人でも数か月の講習を受ければある程度は動かせるようになっていて。今はまだ、他の建設機器に比べて生産数は少ないが、今後の技術進歩によって建設だけでなく、軍事兵器としての価値も増えてくると予想されている。つまりだ」

甲斐は、信二の言葉に黙って耳を傾けていた。

「今のうちに多くの若者にSVの操縦を覚えさせておけば、将来国にとつては色々都合が良いのさ。実際、外国では学校がSVの授業をやるっていうのは珍しくない。日本の導入は遅いぐらいだ。特に鎖国をしている日本は、国防について外国の協力も得にくいのに」

外国。饒舌に説明されるSVの説明などよりも、甲斐にとって新鮮で興味を引く言葉だった。

鎖国大国日本。

現在、日本は一般市民レベルでの外国とのやり取りができない状態である。

二十一年前。大同土士の対立が激化し第三次世界大戦が勃発した際に、歴史的背景から他国を攻める軍隊を持たない日本は中立を宣

言し、時の政治家はそれを各国に認めさせることに成功した。

さらに日本は戦争の断固反対を訴え、その意思表示の一環として、戦争終結まで日本人の出国と、外国人の入国を禁止とする宣言を發した。

結果として、世界に存在する国の9割は戦争を行っていないという状態の中、戦死者を二十年間一人も出していないのは日本だけである。

そのかわり特別な事情があり、かつ国から特別な許可をもらわない限り、一般の日本人は外国に行くことや、インターネットなどを利用して海外とやり取りをすることもできなくなってしまった。

一般市民レベルで海外の様子を知ることができるのはニュースで流される外国の映像や、日本国内で放送される日本語吹き替えのドラマや映画ぐらいである。

「信二。お前の家族は特別な許可をもらって外国に住んでいたと言ったな。外国ってどんなところなんだ」

問いかけると、信二はそのまま黙り込んでしまった。こちらに返す言葉を吟味しているようでもある。

「いや、そんな深刻に考えなくてくれよ。ニュースなんかで世界中戦争ばつかしてるっていうのは知ってるんだけどさ。俺も含めてみんな外国なんて行ったことが無いから、外の事にはなんでも興味があるっていうか」

「すまないが、外国に住んでいたといっても、俺の家があったのは日本人ばかり住んでいる日本街で、そこから一步も出たことが無いんだ」

「へえ、それじゃあさっきの話は？」

「日本人街に来ていた外国人に聞いたんだ」

「なんだよ。お前が見てきたわけじゃないのか」

「期待させたならすまなかったな」

「いいけどな。そういえば、信二はSVに乗ったことはあるのか？ さっきやたら饒舌に話してたけど」

「工事現場でSVのバイトができる基本的な資格は持つてる。もつとも外国のもので、日本じゃ使えないけどな」

「そうかそうか。じゃあ特訓の際はお前に声をかけるとしよう」

「特訓つて、SVでも霧島さんと勝負するのか？」

甲斐は当然だとばかりに笑って見せた。

「そんなに嫌がらず付き合ってくれよ。一緒に帰るときにタイヤキでも奢るから」

「まあ、バイトが無いときは別に構わない」

信二の肩に手を回して校舎に向かって歩き出す。そろそろ予鈴がなる時間だ。遅刻をすれば朝に文子から釘を刺されたのもあるのの後が怖い。

。

『生徒の呼び出しをします。1 - A霧島響子さん、真田甲斐くん、武田信二くん。放課後に生徒会室に来て下さい。繰り返します。1

- A霧島響子さん、真田甲斐くん、武田信二くん。放課後に生徒会室に来て下さい』

「という呼びかけに従って来たんだけど、何か用か文姉え」

一日の授業も終わり、甲斐が帰り支度を整えて響子、信二と共に生徒会室に顔を出すと、すでに教室の奥の席には霧島文子の姿があった。

霧島文子は生徒会長である。

いつもなら彼女を補佐する他の役員がいるはずだが、今日は一人だけのようだ。

「よく来たわね。とりあえず座りなさい、三人とも」

文子の誘導に従って、甲斐は身近な椅子に腰かけた。その隣に響子も座る。

「初めまして。武田信二です」

信二が腰かける前にペコリと頭を下げた。

(そういえば、信二は文子さんと直接こうやって話すのは初めてか)
信二は少々緊張した面持ちだった。おそらく学内では才色兼備で有名な文子と話すことに、少なからず動揺しているのだろう。その気持ちは、甲斐にもよく理解できた。

当の文子は、信二の心情を察したのか温和に微笑んで見せた。というか、おそらくそういう反応をされるのに慣れているのだろう。「そういえば、あなたとは初対面に等しかったわね。初めまして。私は霧島文子。そこにいる響子の姉で、この学園の生徒会長を務めています」

「霧島先輩の事はもちろん知ってますよ。有名人ですから」と、信二はどこか恐縮した様子で席についた。

「私もあなたの事は知ってるわ。転校早々学園随一の不良と仲良くなつた子だものね」

「信二。お前、そんなのと付き合ってたのか。すぐに縁を切った方がいいぞ」

甲斐が友人の身を案じて言っていると、文子はその細い指を額に当てて顔を振った。

「あなたの事を言ってるのよ“真田君”」

甲斐が反応するには少し間が必要だった。

「えっ、俺ですか？」

「自覚が無いの？」

文子は会長用に設えられたビジネスデスクの引き出しからファイルを取り出し、パラパラとめくる。

「過去、響子との勝負によって校内の器物破損が十三件。怪我をした学生は五人。これは傷害ね。不良少年と呼ばれるには十分な実績だと思うけど」

甲斐は反論できなかった。

「ああ、あと一部の女子生徒からセクハラまがいのナンパが酷いので何とかしてほしいという嘆願書も何通か来てるわ」

「何ですかそれは！ その嘆願書は一体誰から？」

「見たら、多分死にたくなるわよ」

「……じゃあ、いいです」

「そつしなさい。その方がこの十一人も喜ぶわ」

と、文子は引き出しから更に何通かの封筒を取り出した。ちなみに差出人の名前はこちらからばつちり確認できる。

「全員、知ってる名前だよちくしょお！」

そこに書かれていたのは、甲斐が一度は体育館裏に呼び出したことのある人たちばかりだった。

あるうことか、彼女たちは甲斐の告白をセクハラとして生徒会に訴えたらしい。酷い話である。セクハラなんて。せいぜいキスを求めたぐらいなのに。

「文姉え。今日は稽古なんだ。甲斐を弄ぶのはそれぐらいにして本題に入ろつぜ」

うずくまつて、「みんな俺の純情を踏みにじりやがつて」と呟きながら机に涙を溜めている甲斐を横目で見ながら、響子は話を促す。「そうね。ごめんなさい。本題に入るわ」

文子は手元のファイルを机の引き出しに戻した。甲斐の方からはその引き出しにまだファイルの束がたくさん置いてあるのが見える。元々、甲斐にとって好ましくない情報が書かれたファイルの保管場所である。何か見えても自分にとってプラスになるとは思えないので、意識してそちらの方に視線を向けないようにした。

「あなたたちを呼び出した理由は、来週から始まるSVの授業についてお願いがあるの」

「お願い？」

響子が不安そうな顔を始めた。姉からの“お願い”で良い思い出があまり無いからだろう事は、容易に想像できた。

「国からの依頼だね」

「国から？」

話が一気に学外の所まで及んで、三人は首をかしげた。

「学園の優秀な生徒を三年を除いた各学年より一名、土日を使つた

三日間のSVの研修を受けさせたいって話で。二年は特に指定は無かったから私が行こうと思うんだけど、一年生は先方からの希望があつてね」

そして文子は、妹を見た。

「響子。あなたをご指名なのよ」

「私を？」

驚く響子の隣で、甲斐は内心では納得しながらも、面白くない心境を味わっていた。

国からの指定。響子の評価は学校を超えて認められているという事なのだろう。全日本空手道大会女子の部にて圧倒的な強さで優勝し、助っ人と称して公式試合には出ないものの、あらゆるスポーツ競技で強豪と恐れられる相手に勝利を重ね、公立高校の中では優良とされるこの六文高校の学年首位取得者なのだから無理もない。

やはり響子なのだ。皆から求められるのは真田甲斐ではなく。

響子を横目で見ると、彼女は唇を噛んで俯いていた。

「断る」

程なくしてハッキリとした回答を放つ。

響子のこの答えは、甲斐にとって予想できた事だった。

響子是这样見えて目立つ行動というのを嫌う。いや、注目されるのを嫌がるといった方が正しいかもしれない。どうしても頼まれる各部活動などの助っ人も練習試合なら参加するが公式試合には頑として出ないし、クラスで推薦されたミス六文の参加なども断っている。空手の全国大会も優勝後の取材なども全部断っていた。

そのような事例と彼女の性格を、長年響子と付き合ってきた文子も当然知っている。

「そうでしょうね」

と呟いただけで、文子はあっさりと次に移る。

「ちなみに、先方からはもう一人指名があつてね」
なんとなく甲斐は予想がついた。

「真田君。あなたなんだけど」

「俺も辞退します」

甲斐は律儀に片手をあげて答えた。もちろん、二番手の指名で乗り気になれないという気持ちが無いといえば嘘になる。しかし、それ以上に、

「俺はSVでも響子と勝負するつもりです。自分だけ優先的に正式な指導を受けられるような講習は受けたくありません」

扱いのなれた友人に特訓に付き合ってもらう程度ならともかく、三日間とは言えプロから講習を受けた後で得るアドバンテージなど気分の良いものではないし、何よりフェアではない。

隣の響子が小さく笑った。

「何だよ響子」

「別にい。素直に受けとけばいいのと思っただけ」

「ほっとけ。俺は俺のやり方と考え方でお前に勝つ」

「そうかよ。今度は何を奢ってもらおうかな」

とても楽しそうに言う響子を、甲斐は齒ぎしりしながら睨む事しかできなかった。

文子は、そんな甲斐と響子を交互に見て、

「そうねえ、まあ、そう言うわよね。でも、学校から代表生徒を出すのは決定事項なの。だから、武田君にも来てもらったんだけど」

次に文子は机から新しいファイルを取り出して中を見る。ファイルのタイトルは“生徒成績表”であり、通常であれば教員しか見ることができないものだ。しかし、文子はお構い無しに、まるでコンビニで雑誌を立ち読みするぐらいの気軽さで、そのページをめくっていく。

「武田信二君。あなた運動がかなり得意ね。それに、外国でSVの操縦資格も取っている。指名は響子と真田君だけど、あなたでも十分どころか、あなたの方がいいかもなんて思ってたね」

手元のファイルを閉じて、文子は信二に体を向けた。

「どう、受けてもらえないかしら？」

信二は困惑した表情で甲斐を見る。

「あゝ言っておくが信二。俺は文子さんにお前がSVの操縦資格を持っているなんて喋ってないからな」

「そうなのか」

「諦める。この学園にいる以上、文子さんの前では個人のプライベートルートなど無いに等しい」

信二は黙り込んで視線を下に落とした。相当悩んでいるようだ。どこことなく、断る理由を模索しているようにも見える苦い顔をしている。

文子は無理に答えを促さない。

やがて信二は、

「分かりました」

と観念して小さく頷いた。

「ありがとう。助かるわ信二君」

「そうと決まれば、バイトの都合を付けないといけないので、今日はもう失礼します」

「ええ。詳細は追って連絡するわ」

「それでは」

「じゃあな信二」

「ああ、また明日」

信二は甲斐だけでなく響子にも小さく手を振って、生徒会室から退出した。

「さてと、あなたたちももう帰っていいわよ」

短く応じて、甲斐と響子は席を立つ。

文子は机の端に重ねてあった書類を自分の方に引き寄せた。席から動かないところを見ると、まだ何かしらの仕事が残っているようだ。

甲斐は、改めて生徒会室内を見渡し、

「ほかの役員は？」

「今日の生徒会は休みよ。私は雑務が残ってるから休日出勤」

「大変だな文子さん」

その言葉を聞いて、文子は疲れを込めたような息を吐き、

「甲斐ちゃん」が生徒会役員になってくれれば、私の苦労も減るんだけど」

文子は、甲斐を呼ぶときは通常“甲斐ちゃん”と呼ぶが、学内では“真田君”と呼ぶ。なんでも生徒会長として、そのあたりは分別をつけたいらしい。しかし、今は響子と甲斐しか場にいないので、その分別は必要ないという事なのだろう。

「あゝ、考えておきます」

甲斐は苦笑して応じた。正直なところ、これ以上やらなければならぬことが増えるのは、自分の対響子トレーニング時間も確保できなくなるので遠慮したい。

という考えを、文子は当然見抜いているのだろう。彼女はそれ以上の要望を言わなかった。

「まあ、いいわ。その分、晩御飯を楽しみにしてるから、ちゃんと茄子を買って帰ってね」

「了解しました」

「ああ、そうだ。夕方五時から始まるサスペンスドラマを録画しておいてくれない？ 帰るのが遅くなりそうなの」

「珍しいな文姉え。いつもはキッチリと録画予約してから学校に来るのに」

「私だってド忘れすることもあるわよ」

「今日はどんな内容だっけ？」

「今日はね——」

それから本日のサスペンスドラマの内容について他愛の無い話をし始めた姉妹を尻目に甲斐はチラリと壁に掛けられた時計を確認する。

「分かったよ文子さん。録画しておく」

甲斐は床に置いた鞆を肩にかける。

「じゃあ、さっさと帰るぞ響子。満腹堂に寄るんだろ」

「了解」

「満腹堂……」

文子は作業の手をピタリと止めた。

「あの甘味屋の？ 二人で行くの？」

「ええ、まあ」

文子に顔を向けられて、甲斐は小さく頷く。

すると文子は腕を組んで、背もたれに体を預けるとジツとした視線を甲斐に送る。少しムツとしているように見えるのは気のせいだろうか。

「なんですか？」

「別に。じゃあビデオの件だけど。録画はしなくていいわ。ここで見るから」

生徒会室にはテレビが据え付けられている。ちなみに、他の教室は安物の特売品テレビだがこの生徒会室に限って超薄型のハイビジョンテレビである。甲斐は同じ型のテレビが地元の電気屋で二十万以上で売られていたのを見たことがあった。

以前に一度、甲斐は生徒会の予算表を見せてもらった事があるが、そこに“生徒会特別予算”というかなりの額の予算が文子が生徒会長になった代から組まれていた。

改めて見ると、生徒会室は机、テレビだけでなく、その他備品についてはよいものが揃っている。それらは全部文子の代になって導入されたものだ。もっともお金があるなと思い、前にそんな予算を組めた理由を尋ねてみたが、文子はただ静かに微笑むだけだった。

「へっ、なぜですか。別にいいですよ」

「満腹堂に寄って夕飯の買い物をして家に付くと時間的にはギリギリでしょ。今日は稽古の準備もあるだろうし。学内の備品を私用するのは気が引けるけどここで見るわ」

「悪いな文姉え」

「別に、大したことないから構わないわ」

告げるように言い放つと、文子はそのまま手元の作業を再開し、

それに没頭し始めた。

甲斐と響子は、それ以上の滞在は作業の邪魔になると判断し、教室を後にした。

1 - 3 下校で寄り道

学校から満腹堂へ向かう途中に商店街があり、その中心には地元
の芸術家が設計した噴水がある。駅のすぐ近くでもある事も手伝
つて、人通りが多く、町民からは待ち合わせのスポットとしてもよく
親しまれていた。

そんな場所で、甲斐はある目的をもって奔走していた。

「お姉さんお姉さん、今ヒマ？ 良かったらこの後お茶でも。えっ、
だめ？ なあんでさ。そんなこと言わずに。俺と、ってちよつと待
つてよ」

無情にも、声をかけた美女は甲斐から離れていく。

「ちえー、駄目か」

仕方ないので次のターゲットを探す。すぐに見つかった。制服姿
なので学生だ。活発さを感じさせる校則違反気味のミニスカートと、
目元の泣きホクロがポイント高い。

「カーノジョ。ねえねえ、良かったら今から俺と——」

踏み出すと同時にむんずと後ろの襟を掴まれる。一瞬息が詰まり、
甲斐はグエツと奇怪な声を漏らした。

「やめろ」

振り返ると、非常に気恥ずかしそうにしている響子がいた。一緒
に下校しているので傍にいてもなんら不思議ではないが、

「何だよ！ 邪魔をするな！」

甲斐は響子に詰め寄った。

「泣くな！ あと一緒にいる方の身にもなれ！」

「お前にも奢る！ しかし、ナンパした女の子にも奢ってもいいだ
ろ！？」

「いいわけあるか馬鹿！」

「何で駄目なんだよ！？」

「じゃあ逆に聞くけど。私がナンパされて、その男も満腹堂につれ

て連れて行きたいって言ったらどうだ？」

「ふざけんなっ！ 何が悲しくて野郎と一緒に甘味屋なんぞいかならんのだ！ それなら、いつも通りお前と二人で行ったほうがマシだ！」

「よし。じゃあ、さっさと行こうか」

そのまま響子は甲斐の手首を掴んで歩き出す。

「いただただだっ!？」

純粹な腕力でいえば甲斐の方が強い。しかし、響子は甲斐の手首の力が抜けるツボを絶妙な角度と女性とは思えない絶大な力で刺激しているため逆らえない。

「響子、分かったから放せ！ いや、放して下さい……」

そして甲斐は連行されるような形で満腹堂の暖簾をくぐった。

甘味屋“満腹堂”。外装や内装は饅頭やおしるこ等の専門店らしく木造の純和風的な造りになっている。

特徴的な点としてテーブル席の前の一つ一つに布で仕切りが施しており、そこが他人に見られたくないがゆっくりと甘いものを楽しみたい女性を中心に人気が出た。

黙っていると周りからは女性達の談笑が聞こえてくる。おそらく下校途中の女子生徒達だろう。賑わいから察するに席は相変わらず満席に近いようだ。

「いらっしやいませ」

若い女性の店員に迎えられて、響子は二人であることを告げようとすが、

「あつ、お二人様ですね。いつもありがとうございます」

すでに常連になっているので、勝手に席に促してくれた。

「えっと、絶品饅頭チョコレートパフェの大盛りと抹茶」

席に付いて食べるどころかメニューを開く前から、甲斐は胸焼けがした。

「太るぞ」

甲斐が言つと、

「別に構わない。というか」

響子はわざとらしく脚を組み、そして視線はこちらに向けたまま、細い首筋を見せつけるかのように顔を斜めにして見せた。ポニーテールの髪型と相まって、白いうなじがよく確認できる。

「食べた分のカロリーはキッチリと消費してるからな。問題ない」

甲斐は、視線をそつと下に向けた。そして肩をすくめる。

「そうだな。大盛りでいいのか？ 頑張って特盛いとけよ」

響子は微笑みながら応じた。

「それ以上言ったら殴り殺すぞ」

「あ、あの……」

店員が困っていたので、甲斐は大福と抹茶を注文した。

○

二十分後。

「ふゝ食った食った」

目の前でリングゴ四個を積み重ねたぐらいのグラスを空にし、お腹を擦って席でくつろぐ響子。

その光景にゲンナリしていた時、甲斐は不穏な空気を察知した。

よく耳をすませば、店内で何やら騒いでいるような声もする。

「なんだろうな」

響子も異変に気付いたようで、外の様子を窺おうと仕切りの布をどけた。

「ちょおーつとぐらいいーじゃねーか」

「こっちは客だよ。もうちょっと愛想を良くしてくれてもいいんじゃないの？」

店の中では、男の学生達がなにやら女性店員と揉めていた。もつとも、揉めているといっても、男達が一方的に絡んでいるといった方が正しいようだ。

「なんだあいつらは。一人の女性に寄ってかかって」

「ナンパか。それにしても女性客がばっかのこの店で男四人は一際目立ってるな」

不快感を露わにしていく響子に対して、甲斐は抹茶をすすりながら平然としていた。

「にしても、俺としたことがあの店員さんはノーマークだった。なるほど、メガネを外した素顔があんなに可愛いとは」

男の学生四人に言い寄られている店員さんは、いつも対応してくれる少女で何度も顔を合わせたことがあったが、今はお手洗い場で化粧直しでもしていたのかメガネをかけていない。そして、その顔がすごく可愛い。

というわけで、甲斐は早速お近づきになるために声を掛けたいわけだが、それにはあの四人組が邪魔である。

「仕方ないな」

甲斐が抹茶の器を机に置いて立ち上がると、

「おい、それぐらいにしておけよ！」

「って早っ!？」

甲斐が驚くのも当然で、すでに響子は店員を逃がし、その通路を塞ぐように男たちの前に立っていた。

「何だよお前はっ!」

「割って入ってきてなんなんだよ!」

自分より体の大きな男に恫喝されても響子は引かない。むしろ、甲斐としては引くぐらいの可愛げが欲しい所ではあるが。

「喚くな」

そんな甲斐の想いとは逆に、響子は一度地面を強く踏み鳴らし、睨みを利かせた。

一瞬、男たちが沈黙する。

「ナンパをやるなどは言わないが、時と場所を考えて、節度を持ってやれよ」

「ふざけんなよ女あ!」

「まあ、待てよ。よく見たら結構可愛いじゃん」

男の一人が言い出すと、他の奴らも改めて響子を見た。甲斐から見ても不細工に見えないその顔立ちを確認して、男たちは全員ニヤニヤとした笑みを漏らし始める。

「そうだ。ねえ、よかつたらこれから俺たちとどっか遊びにいいい？ きつと楽しいからさあ」

男の一人が前に出て、響子の肩に触ろうとした。

響子の瞳が鋭くなり、手の甲に血管が二本浮かんだのを確認できた。あれは、長年付き合ってきているから分かるが、響子が殺人三連パンチを放とうとしたときに出てくる兆候みたいなものである。

平和な町の甘味屋で殺戮ショーを見るのは勘弁なので、仕方なく甲斐は場に割り込んだ。

「響子。付き合ってやれよ」

突然の乱入者に場の視線が集まる。特に響子は、今まさに飛び出そうとした瞬間だっただけに、突然水をかけられたかのような間の抜けた顔をしていた。

「悪いね君たち。こいつを付き合わせるから勘弁してくれ」

「なんだお前は？」

「俺？ 俺はただのこいつのツレさ」

そのまま響子の肩を掴んで男達に差し出す。

「お、おい甲斐。何を言ってるんだ？」

先ほどまでの毅然とした態度とは違い、困惑した表情を浮かべる響子。甲斐はその細い肩に手を置いて、更にグツと前に押し出す。

「甲斐！」

「なんだ」

「なんで私がこんなやつらと遊びに行かなきゃならないんだ！」

今にも暴れだしそうな響子の耳に、甲斐はそつとささやく。

「騒いだら店に迷惑がかかる。それなのにこんなところで喧嘩をふっかけやがって」

「困ってる女性を見過ごせと言うのか」

「そんなことは言っていない。俺とて女性の味方を自負している以

上、お前がいかなかったら俺が行ってたさ」

「なら——」

「ただ、ここで悶着を起こせばお店にも迷惑がかかる。違うか？」

「そ、それはそうだが……」

響子は痛い所を付かれたのか、モゴモゴとなにやらを呟いてから無言になった。

「責任とって来い、この馬鹿」

何か言い返したそうにこちらを睨む響子。しかし、結局言葉が見つからなかったのかチツと舌打ちした。

なぜ響子が不満な顔をしているのが甲斐は理解できない。元々この店内で男共をぶちのめすつもりだったのだから、それなら外でやってこいと言っているだけで、その意図も伝わっている筈だが。

「……お前さあ」

響子は肩にかけられた手を乱暴に振り払って、甲斐に向き直る。

「今、自称女性の味方と言っていたよな」

「？ それが何か」

「その女性をピンチに晒すのか」

自らそのピンチに飛び込んだ奴がちよつと何を言っているのかよく分からないので、甲斐は、ふむ、と頷きしばらく黙考する。

「中々面白い高度なギャグだな。斬新でもある」

にこやかに告げると、響子もにこやかに甲斐の足を踏みつけてきた。

「——！」

「あとで覚えておけよ」

「何をブツブツ話してるんだよ」

男の声を受けて、響子は踵を返し、そちらに向かっていく。

「さあ、どこえなりとも連れていけ」

と、響子は胸を張って、腕を組みながら言う。なんだかヤケになっているようでもある。

「へへ、連れは情けないな」

「そうだな」

響子が同意すると、男の内の何人かが甲斐に嘲りの視線を向けてきたが、

「俺は平和主義なんだよ。もつとも、あくまで“俺は”だけだな」

と甲斐は軽く流した。それよりも、足が痛かったというのもある。足をさすりながら響子を見ると目が合った。しかし、彼女はすぐに不機嫌そうな顔を甲斐から背けてしまった。

「なんだこいつ、訳わかんねえ」

「単なる強がりだろ。こんな奴は放っておいてさっさと行こうぜ」
笑いながら歩き出す四人と無言の一人を見送ろうとしたとき、入り口の扉が外から開かれた。

響子が戻ってくる前に会計を済ませておこうと思ってすでに財布に手をかけていた甲斐は、その手を止めることになった。

「あゝ疲れた」

「今日の補習は長かったあ」

「次のテストは頑張りましょう」

入ってきたのは女子高生三人組だった。ここは甘味屋なので、女の子が入ってくること自体珍しくは無いのだが、その身にまとう制服には目を見張るものがあった。

私立桜南女子学園。隣町にあるお嬢様学校で、芸能人を受け入れており、その影響かオシャレな学生が多く、またその制服を着るのを憧れている女の子も多い

当然、男子の間ではよく噂になる学園であり、その存在は広く知られている。

四人の男達も同様だったようで、彼女たちを視界に入れた途端一斉に軽い口笛が鳴らした。

自分たちに近づいてくる甘味屋に似つかわしくない存在を確認して、三人の少女達の顔が強張った。

「なんですか、あなた達は」

「可愛いねえ」

「君たち私立桜南女子学園の子だね」

「うつひょく、マブ。ねえねえ、よかったら今から俺たちと遊びに
いけない？」

「ちょうど四対四になるしさあ」

「結構です」

明らかな拒否見て取れるにも関わらず、男たちは諦めない。

「そんなこと言わないでさあ」

近寄る男に、身構える少女達。

響子が我慢も限界といった感じで「おい！」と声を出した。しかし、その時にはすでに甲斐は早足で近づいて、男から少女たちに伸ばされた手を捻りあげていた。

「あだだだだ！」

手に込める力を更に強めて、甲斐は少女たちを庇うように立った。

「汚い手で彼女達に触るんじゃない」

捕えていた相手をドンと押す。解放された男は捻られていた手首を擦り、

「お前。ふざけんなよ！」

と甲斐に掴みかかった。

突き出された手を甲斐は易々と躲し、その勢いで接近。相手の足を自分の足で固定させ、腕で相手の上半身を掴み地面に投げる。そして、倒れたところにみぞおちを狙って踏みつけた。

男は苦しげなうめき声を漏らし、気を失った。

甲斐は残りの三人の男を見渡す。

「どうだ。このまま黙って出ていかないか？ 怪我はしたくないだろ」

女を差し出してきた情けない奴という認識だった男から突然の反撃を受けて、呆気に取りられていた男達だったが、やがてハツとし、怒り込めて甲斐を睨む。

「何をやってんのか分かってんか！？ ああっ！」

「てめえ！ さっきまでビビってたくせに！」

「ビビる？」

甲斐は心底可笑しい気分を味わっていた。

「そんなわけないだろ。こちららいつも人外と格闘してるんだぜ」

「訳の分からない事を！」

「覚悟はできてんだろうなあ！」

再び殴りかかれる。甲斐はそれを手でさばき、そのまま腕を相手の首筋に絡ませて顎に掌底を打ち込む。

男はその後、脳震盪を起こしてフラフラとよろめいてから地面に倒れこんだ。ここにきて、残りの男二人は甲斐がただの素人ではないことに気づき、攻撃を躊躇し始めた。

「ナンパというのはそんな無理やりっぱいのじゃないんだ。あくまで彼女の方からも一緒に楽しい時間を過ごしたいと思わせるものなんだ」

甲斐はしみじみと告げた後、ここで初めて拳を握った。

「それが分からないなら。教えてやろう」

○

男たちに料金を払わせて店から叩きだした後、甲斐は私立桜南女子学園の三人組の前に立った。

「お怪我はありませんか？」

尋ねると、一人の女性が代表して頭を下げた。

「大丈夫です。危ない所を助けていただいてありがとうございます。ました」

「女性が困っていたら後先考えずに助けてしまうのが僕の性分で」

「……私を突き出しただろ」

甲斐の背後から追及するように呟く声が聞こえてくる。

「か弱い女性が困っていたら助けるのが男の務めですから」

「この野郎。わざわざ言い直しやがった」

遅い女からの訴えはスルーした。

「しかし、君たちみたいな魅力的な女性たちだったらこういう事も日常茶飯事なんだろうね」

「いえ、そんなことはありません」

「こういう事は初めてで、どうして良いのか分かりませんでした」

「本当にびつくりしました」

「では、次にこういう事があつたら、周りの人に助けを求めるといいですよ。もっとも、傍に俺がいればいの一番に助けに現れますけど」

前髪を掻き上げてニツコリと微笑んでみせる。使い古された仕草ではあるが、少女達の表情を見る限り、そう悪くない印象を与えたようだった。

ちよっと思いつてみようか、と甲斐は考えた。

「そうだ。これも何かの縁ですし、今から一緒に抹茶でもいかがですか？」

「えっと。それって……ナンパ、ですか？」

少女たちの仕草から不快感は見受けられなかった。

「ごめんなさい。俺もやっぱり君たちみたいな魅力的な女性たちを目の前にしてしまうとつい、ね。でも無理強いするつもりなんて微塵も無いから。でも、よければ俺のわびしいティータイムに華を添えて欲しいな。もちろん、奢るからさ」

「うーん。どうしようか」

一番前にいた少女が他の二人に尋ねると、

「私はいいいよ」

「はいはい。私も賛成」

と乗り気だった。

「では、よろこんで一緒にさせていただきます」

甲斐は心の中で小さくガッツポーズした。

「本当！？ 嬉しいなあ、それじゃあ店の奥に行こうか」

「甲斐」

呼んだのはさっきからずっとしかめっ面をしている響子だった。

「何だよ響子」

「私は先に帰る。稽古の時間には遅れるなよ」

「分かってるよ」

「なら、いい」

そして響子は出口に足を向ける。その時、自分が少女たちにジッと見られている事に気が付いた。

「なんだよ。私の顔に何か付いてるか？」

と響子是不機嫌そうに言った。響子が見知らぬ人にそのような態度を取るのは珍しい。

一暴れできなかったのでフラストレーションが溜まっているのだろうか、と甲斐は勝手に想像した。

「響子って、もしかして六文高校の霧島響子さん？」

「そうだけど」

三人の少女たちは顔を見合わせてから、甲斐を見た。

「あの、あなたはもしかして真田甲斐さんでしょうか？ 六文高校の」

「あれ、俺の事知ってるの？」

肯定すると少女三人はまた顔を見合わせた後、少女の一人が呆れとも怒りとも取れる表情を浮かべて、

「助けていただいたことには感謝してますけど。でも、馬鹿にしないでください」

そう言い放った。

「……はあ？」

甲斐はその言葉が自分に向けられたものと理解するのに少し時間がかかった。

しかし、彼女から感じられる先ほどとは違った拒絶のオーラは間違いなく本物だった。

「ほら、帰りましょ」

「まったく何よ。馬鹿にして」

「ちょっとときめいたのになあ」

結局。三人の少女は足早に店から出て行ってしまった。

響子は甲斐を見ると。

「……」

甲斐は固まっていた。

「……なあ、響子」

やがて固まった甲斐から擦れた声が出た。

「なんだ」

「俺はあれか？ 女性に嫌われるフェロモンでも醸し出してるのか？」

響子は腕を組んだ後、少し考え込んでいたが、やがて甲斐の背中をバシンと叩いた。

「まあ、気にするな」

「気にするわ！ 何なんだ！ 今めちゃくちゃいい雰囲気だったじゃん！ なのになんでこうなるの！？」

「泣くなよ甲斐。いいじゃないか。気にしたって原因は分からないんだから」

「何か嬉しそうだなお前！」

「べ、別にいい」

響子はぎこちなく「はははっ」と笑う。

「ほら、元気出せよ。仕方ないから杏仁豆腐奢ってやる」

「300円の杏仁豆腐で俺の心の傷が癒せるものか！」

「あつ、店員さん。杏仁豆腐二つ。会計は先に済ませます」

「つてお前、まだ食べるのかよ」

「あつ、伝票は別々で、ひとつ大盛りにして」

「もちろんお前が大盛りの方で、そっちは俺が奢るんだろうな畜生！」

それでも結局。甲斐はヤケ食いと言わんばかりに大盛り杏仁豆腐を三人前平らげた。

なぜか、甘いはずのそれは少しだけしょっぱかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6060x/>

セカンド・エース

2011年12月18日12時45分発行